

---

# あなたを護る為には

godaccel

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あなたを護る為には

### 【Nコード】

N7517K

### 【作者名】

godaccell

### 【あらすじ】

時は過ぎ、人間は過剰科学により誕生した超科学人造人間、通称ロイド、により滅亡してしまった。駄文ではありますがどうぞよろしく！二話で完結しますが、続きや間が気になるのでしたら、おいおい考えていきます。

## 女サイド

超科学人造人間【ロイド】。

踏み入ってはならない領域に手を出した人間はその日滅んだ。  
その世界に生き残るのはロイド達だけとなった。

みんなその過剰科学オーバーテクノロジーを使って生活していた。

ある者は一定の条件を揃うと出来る、空間転移ワープを使い宅配便。

ある者は形状変化トランスを用いてモデル。

ある者は過剰にホルモンを分泌して治療全般ヒーリングなどを行っている。

そんな中で唯一人、なんの能力かが分からないロイドがいた。

そのロイドは恐れられ強制収容所に無期に渡り入っている。

死刑が執行されないのは、あまりに奇妙であるが為だった。

そして、彼は私の彼氏だったロイドだ。

噂で聞く彼は確かに奇妙だった。

どのような拷問に対しても平気な顔でやり過ごし、あらゆる快樂が抜け落ちた瞳は拷問の執行者を逆に拷問するかのようだったらしい。

独りでもう十年に渡ってそこにいる彼を誰も助けようとはしなかった。

そんなある日、私のもとにいかつい警備服をきたロイドが来た。

私は何故捕まるか分からなかったので、そのロイドから逃げようと思った。

しかし逃げられなかった。

警備員のロイドの能力のほとんどは、身体強化トリガーや妨害電波ハックの様な

能力ばかりで、私の能力では太刀打ち出来るようなものではない。

あっさり捕まった私が連れてこられたのは収容所だった。  
そう、彼がいる場所だ。

しかしその中で私が連れて行かれたのは独房などではなかった。  
とある磔にされた囚人の前、そう、彼の前だった。  
私はそこで、椅子に座らされて、固定された。

「お前の歪んだ顔が見てみたいなあ……」

後ろから拷問官のような男が狂った声をだす。

それで何をするか分かったのか、後ろを見れない私の変わりに彼  
が何かを言おうとした所、それを打ち消すように大絶叫が響いた。  
私の悲鳴だ。

あまりの痛さに悲鳴が出てしまったのだ。

私の胸から突き出る物は周囲十センチはあろう極太の杭だった。

それがすぐに引き抜かれて血が溢れ出す、そのはずだった。

しかし血は溢れ出さずに、細胞が急速に再生して、一秒を待たず  
に完全再生した。

私の能力は全ての治療全般のトップクラスと言われる能力。  
その名も、絶対蘇生<sup>レイズ</sup>。

故に杭を刺す程度では痛さしか無く、絶対に死なない。

それをこの拷問官はわかっているのだろう、続けざまに杭が身体  
を貫いた。

その場所に私の悲鳴がずっと木霊し続けた。

狂ってしまいそうだ。

助けて欲しかった。

それでも……

目の前で私を見て苦痛に歪んでいる彼の顔を見て、少しだけ嬉しかった。

### 次の瞬間。

もう何がわからなくなっちゃった。  
どうしてこんな場所にいるのかが分からない。  
どうして体中が痛いのか分からない。  
どうして椅子に固定されているのか分からない。  
どうして…こんな温かい気持ちになっているのか分からない。

そんな私の縄はひとりでに解けた。

目の前には見知らぬ男が立っていて、私を収容所から連れ出してくれた。

外の世界は明るかった。

ロイド達だけになってからは、オーバーテクノロジー過剰科学によって腐敗した大地と  
大空、そのどちらも暗かったのだ。

しかし私はその光景が当然のものとして受け入れてしまった。  
理由は分からないが、昔からそうだったような気がするのだ。

その日から私は明るい大地のしたで暮らしている。

しかし、私の胸には大きな穴が空いているようだった。  
それが何なのか、私には分からないし、知る術もない。

しかし、それはとても大切なものだったはずだ。

## 男サイド

超科学人造人間【ロイド】。

踏み入ってはならない領域に手を出した人間はその日滅んだ。

その世界に生き残るのはロイド達だけとなった。

みんなその過剰科学オーバーテクノロジーを使って生活していた。

この世界は腐敗している、その用にしか俺は感じる事が出来なかった。

俺は人類の残した最後のロイドだ。

有する能力は、タイムトラベル時間跳躍。

俺はそれを使って何度も人生に挑戦した。

故に人の何倍ものスピードで、世界の無情さを思い知ったのだ。

何回やり直したか、そんな事百を超えた辺りから数えるのを止めてしまった。

しかし結果は全て似たようなものだった。

能力の使えない、いや、使ったという証拠が残らない俺は決して受け入れられる事は無かった。

人間だと勘違いされる事も多々あった。

最終的には全ての場合、收容所に納められる事になる事だけは不変だった。

だから俺は自分を殺した。

何も感じない、あらゆる感情をシャットアウトした。

そのつもりだったのに、どうして俺は、今、こんなにも…苦しいのだろうか。

礫にされた状態で目の前に昔の彼女だいた。

唯一俺が先に振った彼女だ。

今でも心残りが有るほどの女だ、今でも一番大好きな…。

その彼女が椅子に固定された状態で串刺しにされ続けている。

彼女の能力は、絶対蘇生の為、串刺し程度では死なない。

しかしその能力はあらゆる感情を敏感にさせてしまうのだ。

故に結果は普通に感じるよりも痛いという悲劇。

彼女の叫び声が俺の頭を通過するたびに、閉ざしていた感情がぶり返してくる。

そして何度目かの響きで、俺は大声で彼女の名前を呼んだ。

それは絶叫にかき消されて、拷問官には聞こえなかったようだったが、彼女は気付いてくれたらしい。

涙に濡れた顔で確かに俺の方を見て、痛いであろうにも関わらず笑ったのだ。

誰もが放棄して、すべてが見放したこの異端者に、だ。

俺の感情は簡単に復帰して、一瞬にして能力を発動した。

飛んだ先は、まだ人が生きている世界。

その中で俺は警察の代わりとなるロイドを造っている工場を破壊した。

力は時間跳躍だが、それを応用すれば、簡単に潰す事は出来た。

そして次に俺が壊したのは拷問用のロイドを造る工場だった。

それも手短かに終えて、ふとテレビが見えた。

そろそろ完成が予想されるロイドだった。

有する能力は絶対治癒そう名付けられるロイドだ。

俺はしばらくそれを眺めた後、とある工場を潰した。

その工場で作られる予定だったロイドの力は、時間跳躍、躊躇い無く破壊してその場を去った。

それから幾年も時を経て、人間とロイドは共存する世界になっていた。

その根幹で俺はいつも、世界を見張っていた。  
どちらも共存出来るように、そして誰も不幸にならないように。

そして、とうとうこの日がきた。  
俺は収容所に来ていた。

ここはただ造られただけの場所であり、ある一つの事柄を達成する為だけに世界が造った場所だった。

その通路をどどん奥へと進んでいく。  
そしてあった。

磔板と、椅子に座る彼女の姿が。

俺は椅子に近づくと、彼女を椅子に縛る縄を解いてやった。

彼女は訳の分からないといった顔でこちらを見るが、説明するわけにはいかなかったため、そのまま無言を突き通した。

そして彼女を安全な場所にまで連れて行った後、俺は彼女と別れた。

それからただ一つの目的の為に行動した。  
彼女の平和を第一に考えて、彼女が楽しいといった感情で笑える為。

ただそれだけの為に俺は

生き続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7517k/>

---

あなたを護る為には

2010年10月8日15時08分発行